

どこにでもいる技術者パパ



青池 卓

三菱樹脂(株) 商品開発研究所
[526-8660] 長浜市三ツ矢町5-8
グループリーダー, 博士(工学).
専門は高分子表面, コーティング.
aoike.taku@mn.mpi.co.jp
www.mpi.co.jp/

今から四年前に遡る。長女が1歳を迎えるにあたって、妻が復職することになった。目前に迫る共働きに備えて、妻と私は一緒にワークライフバランス(WLB)について考えぬいた。WLBと名のつく書籍を読み、WLBの第一人者である小室淑恵氏の講演に夫婦揃って参加し、周囲にも協力を仰いだ。共働き体制作りを計画的に進めたことにより、共働きは良いスタートが切れたと思う。夫婦ともに仕事の成果を出し、娘は天真爛漫にすくすく育ち、一昨年には第二子となる長男の誕生にも恵まれた。

仕事も家族の時間もあきらめない—その姿勢に徹したことで、私なりに育メンパパを満喫して来られたと思う。「乳児は何で喜び、何で安心を感じるのか？」お乳という武器をもたない私は、私なりの実験・考察を重ねた。おそらく技術者としての血が騒いだのであろう。たとえば、妻の腕の中で眠りについた娘は、布団に置くと泣き出す。そこで、妻の腕のホールド感を再現するために、横抱き時の腕の角度を測定し、それと同値の角度で布団を組み直して娘を置いたところ、娘はすやすやと眠りについた。それに味をしめ、オリジナル子守唄の作詞作曲(?)も手がけた。単調に子守唄を歌ったところで、横抱き中の娘は眠ってはくれない。試行錯誤したところ、抱かれた娘が安心しながら眠りにつくには、抑揚のある子守唄と足踏みによる骨を通じた振動がポイントだという結論に至った。このオリジナル子守唄は、甥っ子にも友人の子にも適応を確認済みで、百発百中で寝かしつけられる自信作である。

さて、そんな私に変化が訪れた。昨春から東京勤務

となり、滋賀に住む家族と離れて単身赴任することになった。週末はできる限り帰郷し、妻と一緒に子供たちの成長に目を細めている。離れている分、妻の大変さを気遣うが、妻は意外と平気な様子。妻曰く、ブレないその強さの源は、長女出産時の私が妻にかけた言葉なんだとか。十時間の陣痛の末、胎盤剥離となり胎児の心音が低下し、緊急の帝王切開となったときのこと。不安がる妻に対し、私は「子供は心配するものではなく、信じるものだよ」と声をかけたらしい(言った本人は何も覚えていないのだが…)。以来、妻は何があってもその言葉を拠所にして頑張れているとのことだ。私の言葉が家族の絆を強くできているとしたら、身が引き締まる。帰郷したときは、私が食事を作ったり、子供を風呂に入れたり、当たり前の家事・育児を不器用ながら楽しく行っている。

私の目下の楽しみは、娘を自転車の後ろに乗せて、焼きたてのパンを買いに行くことである。琵琶湖からの爽やかな風を受けて、娘は大喜び。最近ではそれが高じて、自転車をもう一台購入、秋には琵琶湖一周を計画している。一方、1歳の息子は、未だ授乳中のためか、ちょっと距離感がある。“ママ”は言えるが、“パパ”は未だ言えない。いつか男同士の会話ができることを楽しみにして、今は、泣いたら手に負えない息子を抱いてあやしている。

家族と子供の成長、家事、育児を、趣味のカメラで、エビデンスとして記録している。子供が巣立つとき、そのエビデンスを子供たちに見せて、仕事も私事も全力投球したと胸を張りたい。